

3-iv. 精神科医からみた連携のコツ ⁴

藤田 博一

高知大学

日々、いろいろな子ども達と接する中で、さまざまな理由で病院へ紹介したい、専門医に診てもらいたいといった希望が出てくることがあるかと思います。しかし、さまざまな事情で実現しなかったという経験もお持ちかと思います。

一つは、本人・家族（親）が医療につながることを納得してもらえなかったことがあるかと思います。本人の納得は難しいこともあるかもしれませんが、少なくとも家族の理解を得てからでないと医療への受診は実現しません。

まずは、子ども自身または子どもの周りで起きている問題点について、共通の認識を持つことから始める必要があります。子どもは、家庭と学校では言動が違うことが珍しくありません。学校では問題があっても家庭ではそうでないことが多くあります。学校は、家庭とは違い集団の中でさまざまな刺激を受けますので、その反応がより強く出ることは容易に想像できます。しかし、家庭内では、本人の強い反応を避けようと、意識、無意識に関わらず家族が家庭環境を調整しながら暮らしています。そのため、自宅では大きな問題になっていないことがあります。もし、このような状況で、学校ではいろいろな問題が起きていると突然伝えられると、家では起きていないのだから、学校の対応に問題があるのではないかと家族は考えてしまっても無理もないのかもしれませんが。家庭と学校では質的にも量的にも異なる環境ですので、どちらかの環境でうまくいっているからと言って、片方でもうまくいっているのは早計です。逆に学校では良い子どもでも家庭では問題行動が目立つお子さんがいることも経験があると思います。最初に、学校や家庭ではどんなことが問題になっていて、それに対してどのように対処しているかという事実を家庭と学校が共通の認識を持つことは、最初のステップとしてとても大切です。そのために重要なことは、話を聞くこと（傾聴）だろうと思います。最初に学校の意見を述べてしまうと、家庭から感情的な反発が出てしまいがちです。問題が起きているのは、「私たちの子どもだけのせいですか？他の子ども悪いんじゃないですか？」「私たちの子どもだけを悪者扱いするのですか」といった反応が最初に起きてしまうと、情報を共有する以前の問題になってしまいます。学校と家庭が対立するという構図は絶対に避けなければなりません。学校と家庭は、子どもの成長をサポートしていくパートナーであるということを前提に考えることがとても大切です。そのためには、まず話を聞くことから始めていくことです。時に、反論したくなることもあるかもしれませんが、家族や本人の話を最後までまずは話を聞いてみるという態度が重要です。話を聞いてくれると家族が感じると、自然と家庭内で起きている問題や支援を必要としているニーズを話してくれるか

もしれません。特に、家庭内での問題については、家族も意識していない、すなわちこれは「普通のこと」と思っているかもしれません。そういった問題を話すこと、すなわち言語化してもらうことで、自然と家族が気付いてくることもあります。そういった交流を通じて、ゆっくり学校で起きている問題を伝えていくことが可能になってきます。一度にたくさんの問題を扱うと混乱しますので、何度かに分けて面談することも場合によっては必要です。このステップはとにかくゆっくり焦らず進めていく事は、その後に良い影響を与えていくと思います。

二つ目は、医療が必要なかどうかについて迷ったという経験はないでしょうか。いろいろな問題が学校で起きていることと疾患や障害とが必ずしも結びつくわけではありません。本当に受診を促しても良いのだろうか、本当に病院へ行く必要があるのだろうかといった迷いはよく耳にします。施設内に、医療機関で勤務した経験があるスクールカウンセラーや養護教諭がいれば、まず相談されるのが良いと思います。他には、学校医、特に小児科医は、子どもの心理的な発達についての診療経験があると思います。また、周囲の子どもへの影響が大きい場合や自傷行為が目立つ場合は診療の対象になる可能性が高いと思われます。先に述べたように、まず関係作りをしながら受診のタイミングを計ることになるでしょう。

また、どこの医療機関につながるのがよいかわからない事があると思います。また、いきなり病院といわれると、敷居が高く感じるかもしれません。そのようなときは、まず各都道府県には必ず設置されている精神保健福祉センターの相談窓口を利用するのが良いと思います。多くの場合、専門職が状況を把握し、必要な場合は医療機関につなぐための相談にも応じてくれます。

最後に、医療機関につながったとしても、すぐに問題が解決することはまずないと思います。家庭や学校での様子が治療によってどのように変わったかといった情報は、医療者は簡単には分かりません。家庭、学校、医療、その他の連携機関との情報交換が必要になります。病院にかかっているから、任せていたら大丈夫…ということにはなりません。大事なことは、その子の成長をコントロールしようとするのではなく、適切な距離を保ちながら支援することです。家庭、学校、医療など関わる人全てがパートナーである事を大切にしていきたいです。